

文化間移動をする若者の社会的包摂における日本語教育の役割  
— 高等学校における「日本語指導」の「特別の教育課程」化とその導入状況から —

## 国内の在日ペルー人の教育的包摂

---

2024年11月16日（土）  
日本語教育学会秋季大会  
@姫路市市民会館

群馬大学  
ピニロス・マツダ・デレク・ケンジ

### 在日外国人の教育から考える社会的包摂

- ① 何が問題なのか？
- ② 外国人保護者と子どもの関係性
- ③ 文化間移動をする若者自ら構築する教育コミュニティとは？
- ④ 日本語教育の役割と可能性について

# 01

## 何が問題なのか？

### [背景]

文化間移動をする若者がキャリア選択をする際に、自らのルーツやルートが障壁となり、**自由な選択ができず、大学進学や自らの希望の業種に就職できていない**現状がある（樋口、2023）。その要因としてエスニック・ペナルティのような社会的な差別も考えられるが、もう一方では**自らのルーツやルートを上手く活用しきれていない**のではないかと考えられる。さらに、子どもの学習活動に保護者が参加できていないところにも彼らの持っている特異性を上手く見出せていないのではないかと考える。

### [目的]

本発表では、ペルーにルーツをもつ文化間移動をする若者に着目し、①家庭内の教育戦略や当事者が施した工夫などについて吟味し、②如何に学校や地域における日本語教育の現場で彼らのキャリア選択のサポートができるのかを検討する。

# 02

## 親子関係

### [ペルーにルーツを持つ人々の家族関係]

#### 保護者の権威の保持

親の持つ価値観や将来への見通しにおいて子どもが距離をおいている部分もあるが、親子関係は良好（角替、2021）

#### 家族の結束力の高さ

親子関係が強固であることがうかがえ、子どもが親に頼るだけでなく、言語の面においては親が子どもに頼っている面も見られる（坪田、2018）

#### 教育重視

保護者の子どもへの期待は大きく、大学進学、そしてホワイトカラーの仕事について欲しいと願っているケースが多い（田巻・スエヨシ、2015）

## 2016年のインタビュー協力者の概要

	性別	高等教育機関の 所在地	生まれ	年齢	来日年齢	学歴
A	女	日本	ペルー	32	7	大学院
B	女	日本	ペルー	28	8	大学
C	女	日本	ペルー	25	5	専門学校
D	女	日本	ペルー	26	9	大学
E	女	日本	ペルー	29	7	大学
F	女	日本	ペルー	26	9	専門学校

## 2024年のインタビュー協力者の概要

	性別	高等教育機関の所在地	生まれ	年齢	移動年齢	学歴
G	男	ペルー	日本	28	日本→ペルー (13)	大学
H	男	日本	日本	28	日本→ペルー →日本 (20-22)	大学
I	女	ペルー	日本	28	日本→ペルー (12)	大学
J	女	日本	日本	18	日本 (定期的帰国)	大学 (通学中)
K	女	日本	ペルー	39	ペルー→日本 (7)	大学

# 02

## 教育戦略

### [第一世代と第二世代の保護者に見る教育戦略\*]

#### 母語・母文化の保持

年齢相応の言語能力を有しているわけではないが、自力でコミュニケーションができる程度の言語能力を有することで、母文化に対する感情がある程度保持できる。

#### メンターの存在

子どもの学習活動に参画できない保護者は学校や地域社会に子どもの将来を託している。そのため、子どもが自らの「メンター」との出会いによりエンパワーされるケースが見られる。

#### 保護者の子どもの教育への関心

子どもの学習活動に参加できなくても、学校の授業参観、行事などには積極的に参加する姿勢を見せることで、子どもの教育に関心があるということを示そうとしている。

#### ペルー人としてのアイデンティティ

家庭内において保護者からペルーに関する肯定的な情報を聞くことで自らの国に対する誇りや関心が保持でき、日本社会において自らのルーツを認識しながら、その特異性をポジティブに活用することができる。

\*保護者が意識的あるいは無意識的に子どもの将来を見据え、目標に基づいて行う教育的な取り組みのこと（志水・清水、2001）

# 03

## 文化間移動をする若者が自ら構築する教育コミュニティ

### [自己実現のための取り組み]

#### 「重要な他者」の発見

学校の先生、親戚の若者など家族以外の「重要な他者」(坪田、2018)との出会いにより、エンパワーされ自己実現につながるコミュニティを構築

ホスト社会と本人をつなげる重要な信頼できる存在

#### トランスナショナルな思考

働く場所に対する柔軟な考え方をもち、日本とペルー、そして第三国を視野に入れたキャリア形成をしている。

従来の就職活動だけでなく、「やりたいこと」につながる可能性を模索

#### ハイブリディティのあるアイデンティティ

「居場所」を自ら見つけ、その時、その場、付き合う人に応じた自分自身を表現している。

さまざまな「場」において適応できるような訓練を重ねている

# 04 日本語教育の役割と可能性

[「重要な他者」の発見や情報提供の場としての日本語教育の現場]

## 言語教育を超えた教育

異文化間移動する若者が日本語が「できる」ようになること、通常学級に戻ることを目的にしてしまうと、本当の意味でのサポートができない可能性がある。キャリア選択のサポートには彼らの特異性を見出し、強みとして認識できるようにするサポートが必要

## ホスト社会への適応

学校での細かいサポートや温かい雰囲気だけでは、実社会へのつながりとしては不十分な可能性がある。そのためには、情報提供とともに実社会でのマナーや基本的な「常識」を教えることも重要。

## 「重要な他者」の発見

「日本語の先生」が「重要な他者」となったケースが今回のインタビュー協力者のなかにもいた。「重要な他者」を見つけるための視野を養うサポートも必要。

# 新たな日本語教育の可能性

## 多文化教育の観点から

### 多文化教育

多文化教育はすべての子どものための教育である

マイノリティの視点に立ち、社会的な公正の立場から多文化社会における多様な民族あるいは文化集団の共存・共生をめざす教育理念であり、その実現に向けた教育実践

多文化教育は学校全体の改革をめざす

学校のユニバーサルデザインは、カリキュラムや学習指導にとどまるものではなく、学校文化を含めた総合的な学校全体の改革を意味する。

### 日本語教育の変革

学校全体で取り組み、外部のサポートを取り入れ

保護者やボランティア団体などのサポートを取り入れながら、学校全体で異文化間移動する若者をサポート。

日本の若者への還元

多文化教育的なアプローチにより、「特別の教育課程」だけでなく通常の課程においても多様な背景を持つ日本の若者にも還元できる実践を。

# 参考文献

稲葉奈々子（編）『ニューカマーの世代交代ー日本における移民2世の時代』 153-178頁、明石書店。

志水宏吉・清水睦美（2001）『ニューカマーと教育ー学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』 明石書店。

田巻松雄・スエヨシアナ（編）（2015）『越境するペルー人ー外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』 下野新聞社。

角替弘規（2021）「日系という表現の消失ーペルー系のエスニック・アイデンティティ」 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平（編）『日本社会の移民第二世代ーエスニシティ間比較で捉える「ニューカマー」の子どもたちの今』 153- 180頁、明石書店。

坪田光平（2018）「生活保護課程に育つペルー系ニューカマーの子どもの将来展望ー「親子関係」と「重要な他者」に注目して」 移民政策学会（編）『移民政策研究』 第10号、79- 94頁、明石書店。

樋口直人（2023）「移民第二世代における教育から職業への移行過程ー複数の社会的文脈への埋め込みをめぐって」 樋口直人・PINILLOS MATSUDA DEREK KENJI（2016）「在日ペルー人児童生徒の教育問題と保護者の意識：神奈川県の日ペルー人保護者への質的調査」『上智大学教育学論集』 第50号、67-81頁。

松田デレク（2019）「『ペルー系ニューカマー第二世代保護者』の教育戦略：『第一世代保護者』との比較と外国人児童生徒の教育支援への示唆」『国際教育評論』 第15号、1-15頁。

**ご清聴ありがとうございます。**

---

**お問い合わせ等  
d-matsuda@gunma-u.ac.jp**